

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：50101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320131

研究課題名(和文) 中近世のアイヌ文化の再構築をめざした学融合的研究

研究課題名(英文) The integrated studies for the reconstruct of Ainu culture in the middle and the early modern period

研究代表者

中村 和之(Nakamura, Kazuyuki)

函館工業高等専門学校・一般科目人文系・教授

研究者番号：80342434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、13～15世紀のアイヌ文化の状況を明らかにすることである。この時期は、近世のアイヌ文化の成立期であるが、文献史料と考古学資料が少ないため、状況がわかっていない。そのため、漢語・満洲語・日本語史料の調査を行うと同時に、遺物の成分分析や年代測定、それに遺跡の電磁探査など、さまざまな分析方法で情報を収集した。

その結果、14～15世紀の北海道でカリ石灰ガラスのガラス玉が発見された。本州でほとんどガラス玉が出土しないので、アムール河下流域からの玉と考えられる。この時期は、元・明朝がアムール河下流域に進出した時期に重なるので、北方からの影響が強くアイヌに及んだことが推定できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the status of the Ainu culture of 13-15 century. This period is the establishment phase of the early modern Ainu culture. With little historical sources and archaeological materials, we have not had enough knowledge about the situation of that time. Therefore, we searched Chinese, Manchu and Japanese historical sources. And we have collected the information from archaeological materials in a variety of analytical method, for example chemical analysis, radiocarbon dating and electromagnetic exploration of ruins.

As a result, the glass beads made by potash lime glass were excavated from the sites of Hokkaido in 14-15 century. The glass beads made in the same period are hardly excavated in Honshu, so it is considered that the glass beads were carried from the lower Amur Basin. This time, the influence of the Yuan and Ming Dynasty had entered the lower Amur Basin, we can estimate the effect of the north area ranged strongly Ainu people.

研究分野：東洋史

キーワード：アイヌ 年代測定 電磁探査 成分分析 ガラス玉 蝦夷錦 交易 文化接触

1. 研究開始当初の背景

近年のアイヌ史・アイヌ文化の研究では、交易を重視する傾向が強い。かつてはアイヌ社会が自給自足社会であるとの前提から、交易を軽視する傾向があった。1980年代の後半以降、交易や文化接触によるアイヌ文化の変容が注目されるようになった。一方、元・明・清代の中国語・満洲語史料の利用が進み、アムール河下流域・サハリン島を経由した交易とその交易品である蝦夷錦の存在が広く知られるようになった。このような遠隔地交易の存在は、アイヌ社会にどのような変化をもたらしたのか。しかし13~15世紀のアイヌ社会の状況が不明なため、この疑問に対する答えはまだ見いだされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、13~15世紀のアイヌ文化の状況を明らかにすることである。擦文文化が終末を迎えるまでは考古学情報が存在し、日本語史料が多く残される近世以降は文献史料によってアイヌ文化の状況を知ることができる。しかし、12世紀ないしは13世紀初頭に擦文文化が終末を迎えると、考古学資料も文献史料も極端に少ない時期が続くことになる。13~15世紀は、近世アイヌ文化の成立期であるにもかかわらず、その状況がほとんどわからない空白の時代とされている。

この問題を解決するため、中国語・満洲語・日本語史料の網羅的な調査を行った。それと同時に、遺物の成分分析や年代測定、それに遺跡の電磁気探査など、さまざまな分析方法で、既存の考古学資料から新たな情報を収集することを試みた。この二つの方法を利用することになって、アイヌ文化の空白期を明らかにすることをめざした。

3. 研究の方法

(1) 文献史料の調査

『国朝文類』『明実録』などの元・明代の中国語史料の調査、謝遂『職貢図』などの満洲語の調査、および中世・近世の日本語史料の調査を行った。

(2) 考古学情報の収集と遺物等の分析

擦文文化期を中心とする考古学情報の収集、および遺跡の電磁気探査、ガラス玉や金糸・銀糸などの成分分析、青銅製品の錆(緑青)などこれまで対象にされてこなかった資料を用いた放射性炭素年代測定などを実施した。

4. 研究成果

(1) 未発掘の遺跡の電磁気探査

史跡上之國勝山館跡・夷王山の中世墳墓群(約650基)で、レーダ磁気探査を行い、火葬墓や鉄製遺物を示唆する反応が得られた。現地の斜面ではレーダ探査は難しく、広範囲での磁気探査では、6基で磁気異常を認めた。

アイヌ墓は鉄鍋・刀等の副葬があることが多く、今後、レーダ探査で詳細を検討する必要がある。

新ひだか町の国指定史跡“シベチャリ川流域チャシ跡群”でレーダ探査を行った。シベチャリチャシ跡では、主体部で現存の塚に沿う反射や周辺部の埋没塚の反応が得られ、シベチャリチャシの範囲は従来より広く、複数塚を持つ堅牢な砦と示された。ホイナシリチャシ跡でも主体部の遺構や埋没塚の反応が得られた。

(2) 北海道から出土したガラス玉の成分分析
北海道内出土のガラス玉資料は、ここ10数年の調査で急激に数が増え、本研究による分析によって、北海道におけるガラスの変遷が明らかになってきた。

本州の弥生文化から古墳文化の時期に相当する続縄文文化期に、北海道へもガラス玉が流入し、カリガラスの淡青色と紺色のガラス玉、植物灰ガラスの濃紺の玉などが出土する。中世に相当する14・15世紀には、本州でほとんどガラス玉が出土しないのに対し、北海道では急激に出土数が増加する。そのほとんどがカリ石灰ガラスであり、大陸の玉との関係が考えられることから、この時期の玉を手懸りとして北海道のガラス玉の変遷を流通面からも追及することが可能である。

(3) 北海道に伝世した蝦夷錦の金糸・銀糸の分析

北海道に伝来する蝦夷錦に使用されている金属糸の材質調査を行った。調査資料は茶地、紺地、赤地蝦夷錦の端布、蝦夷錦の雑刀袋、袱紗などに使用されている金属糸10点とした。調査内容はマイクロスコープを用いた拡大観察および、蛍光X線分析による組成分析である。その結果、紙の片面に銀箔を貼り付けて細く裁断した平銀糸や、紙の片面に金箔を貼り付けて細く裁断した平金糸、芯糸に平銀糸が螺旋状に巻かれた撚銀糸や、芯糸に平金糸が螺旋状に巻かれた撚金糸などが確認された。また、金箔や銀箔が剥がれた箇所は赤色を呈しているものもあり、組成分析の結果、鉄(Fe)が検出されたことから、紙にベンガラなどの赤い顔料を塗り、その上に金属箔を貼り付けて製作された可能性が推察された。

(4) 北海道の出土銭貨の調査と成分分析

アイヌ社会にどの様に銭貨が必要されるのか、特にその流入ルートの解明に力を注いだ。

海外で行った調査では、サハリン島および沿海州から出土する銭貨の様相を把握することに努めた。その結果、北海道で発見される大銭がサハリンからもたらされたことを突き止めた。また北海道では、根室市のコタンケシ遺跡出土の銭貨を調査し、永楽通寶の存在などから本州からもたらされたものと

推測した。

北海道の銭貨は、複数の流入ルートが想定できるが、成分分析からも本州から持ち込まれた資料が多いと推定される。

(5)北海道から出土した青銅製品の鍔の年代測定調査

北海道伊達市有珠オヤコツ遺跡からは、3枚の青銅製の鍔 (No.1-3) が出土している。本研究においては、その年代を特定するために¹⁴C年代測定を試みた。一つ目の資料は鍔No.3の直下から出土した植物片である。測定結果は、 313 ± 18 [BP]であり、これは較正暦年代に換算すると1521~1641[cal AD]に相当する。近年、青銅器の表面に発生した緑青の¹⁴C年代測定法が開発されつつある。そこで、鍔No.2の裏面および鍔No.3の表面より採取された緑青についても測定を行った。結果は、 369 ± 20 [BP]であり、1462~1617[cal AD]の較正暦年代に相当し、植物片の結果とよく一致するものであった。また、鍔No.1の裏面より採取された緑青についても測定を実施した。結果は、 1163 ± 21 [BP]であり、779~936[cal AD]に相当する。この年代は、他の2資料より古い値を示している。その原因の詳細については不明であるが、土壌等の不純物の影響などが考えられる。

(6)擦文文化を中心とする北海道の出土資料と交易との関係の調査

須恵器の壺が特異な状況で出土した石狩低地帯の擦文文化期の事例を取りまとめ、同地域の人々と青森県域以南の人々とは9世紀前半頃から稀少な須恵器や文字ないし記号に対する意識が異なっていた可能性のあることを明らかにした。また恵庭市域における擦文文化期の集落の変遷を河川の流域ごとに分析し、遺構の形態の変化や遺物の出土状況等に在地の人々がアイヌ文化期につながる生活様式を選択していく過程がうかがわれることが明らかとなった。

つぎに奥州藤原氏の権勢をささえた莫大な金がアイヌの採取した北海道産を含んでいた可能性を論じるため、北海道と東北地方の砂金をサンプリングして微量元素の差異を明らかにする作業を行った。北海道砂金史研究会の協力を得ながら北海道内17ヶ所の砂金サンプルを入手するとともに、福島・山形・宮城・岩手各県の計4ヶ所の砂金サンプルを入手し、函館高専において化学分析を実施し今度の調査のバックデータを構築した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

三宅俊彦「清代の銭貨流通」『中華文明の考古学』同成社2014年、278-293頁、査読無。

菅頭明日香、酒井英男「北海道の原産地黒曜石の磁気物性の研究」『情報考古学』19巻

1・2号、2013年、36-42頁、査読有。

酒井英男、菅頭明日香、小黒智久「竪穴住居上層土壌の火災による落下状況を残留磁化から探る研究」『情報考古学』19巻1・2号、2013年、28-35頁、査読有。

石橋孝夫・越田賢一郎・中村和之・竹内孝「石狩市八幡出土のガラス玉の分析」『いしかり砂丘の風資料館年報』第3巻、2013年、23-36頁、査読無。

中村和之・森岡健治・竹内孝「北海道におけるガラス玉の流入とその背景 北海道平取町から出土した資料を中心に」『北海道大学総合博物館研究報告』第6号、2013年、58-65頁、査読無。

中村和之・越田賢一郎・竹内孝「札幌市発寒出土ガラス玉の分析」『北大植物園研究紀要』第13号、2013年、49-56頁、査読無。

三宅俊彦「サハリン出土の銭貨」『北海道大学総合博物館研究報告』第6号、2013年、66-85頁、査読無。

越田賢一郎「12世紀前後における奥州藤原氏と北海道の関連について 中尊寺のガラスを中心に」『平泉文化研究年報』第12号、2012年、53-63頁、査読無。

中田裕香「カマドから検出された須恵器の壺について」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館、2012年、194-209頁、査読無。

瀬川拓郎「中世アイヌ社会とエスニシティの形成」『北から生まれた中世日本』高志書院、2012年、227-224頁、査読無。

中村和之「謝遂『職貢図』にみえるアイヌのイノウカサについて」『史朋』第45号、2012年、1-17頁、査読無。

〔学会発表〕(計2件)

中村和之、泉吉紀、塚田直哉、酒井英男「電磁気探査による夷王山墳墓群の研究」日本情報考古学会第31回大会、鹿児島国際大学、2013年9月28・29日。

Kazuyuki NAKAMURA, The Ainu in the Mongol Period and on the Sea, The 2nd Congress of AAWH (Asian Association of World Historians), Seoul, April 28, 2012.

〔図書〕(計3件)

中村和之・高橋直樹「涌元古銭と新発見のベトナム銭「開泰元寶」」『函館学ブックレット』No.25、キャンパス・コンソーシアム函館・事務局、2014年、全51頁。

瀬川拓郎『コロポックルとはだれか』新典社、2012年、全128頁。

中條利一郎, 酒井英男, 石田肇編『考古学を科学する』臨川書店、2011年、全292頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 和之 (NAKAMURA, Kazuyuki)
函館工業高等専門学校・一般科目・教授
研究者番号：80342434

(2) 研究分担者

酒井 英男 (SAKAI, Hideo)
富山大学・大学院理工学研究部(理学)・教授
研究者番号：30134993

小林 淳哉 (KOBAYASHI, Jun-ya)
函館工業高等専門学校・物質環境工学科・教授
研究者番号：30205463

浪川 健治 (NAMIKAWA, Kenji)
筑波大学・人文社会科学研究科・教授
研究者番号：50312781

佐々木 利和 (SASAKI, Toshikazu)
北海道大学・アイヌ文化研究センター・特任教授
研究者番号：80132702
(平成26年度から連携研究者)

吉田 澪代 (YOSHIDA, Miyo)
名古屋大学・物質科学国際研究センター・研究員
研究者番号：20467278
(平成23年度のみ)

(3) 連携研究者

越田 賢一郎 (KOSHIDA, Ken-ichiro)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号：70585710

三宅 俊彦 (MIYAKEA, Toshihiko)
淑徳大学・文学部・教授
研究者番号：90424324
(平成26年度から研究分担者)

小田 寛貴 (ODA, Hirotaka)
名古屋大学・年代測定総合研究センター・助教
研究者番号：30293690

(4) 研究協力者

瀬川 拓郎 (SEGAWA, Takuro)
旭川市博物館・館長

中田 裕香 (NAKADA, Yuka)
北海道教育委員会・主査

塚田 直哉 (TSUKADA, Naoya)
上ノ国町教育委員会・学芸員

乾 哲也 (INUI, Tetsuya)
厚真町教育委員会・学芸員

竹内 孝 (TAKEUCHI, Takashi)
函館工業高等専門学校・元技術職員

森岡 健治 (MORIOKA, Kenji)
平取町教育委員会・学芸員
(平成25年度以降)

田口 尚 (TAGUCHI, Hisashi)
北海道埋蔵文化財センター・調査課長
(平成26年度のみ)

吉田 澪代 (YOSHIDA, Miyo)
金城学院大学・講師
(平成26年度のみ)